



燃 焼 人生に於ける白熱のとき

著者 福本邦雄

発行所 〓 フジ出版社／東京都
中央区銀座八丁目十一ノ一（大和ビル）／郵便番号 一〇四
／電話 〇三（五七三）二五六一ノ二／振替東京 〇一 一五五
六三＊ 初版発行 〓 平成二年十月一日／制作 〓 星野匡彦
定価 三千五百円（税込）

印刷所 新栄堂

東京都千代田区猿樂町二丁目五番一号

製本所 小高製本工業

東京都新宿区北町四十一番地

* 落丁・乱丁本のお取り替えは、誠にお手数ですが直接フジ出版社
までお送り下さい。――往復送料とも小社で負担いたします。

燃 焼

人生に於ける白熱のとき

福本邦雄

表紙装画 「炎舞」 速水御舟（山種美術館蔵）

燃
焼

も
く
じ

白熱のとき（序にかえて）…… 9

第一部 わが心の歌人たち

第一章 だらりの帯がうごくとき——吉井勇…… 17

1 雪の瓢亭 2 かにかくに祭 3 醒めぬ紅燈の夢

4 歓楽の果てに 5 転落の底から 6 華やかな終焉

第二章 螢追い螢追いつつ——川田順…… 51

1 郷愁のはたる 2 螢は情念の象徴

3 星となった伯耆の螢 4 はたる幽情

第三章 ダリヤは紅しダリヤは紅し——北原白秋…… 75

1 蔵中で知った白秋 2 龍児の転落 3 牢獄^{ひとや}のうたの真実

4 芸術至上主義の周辺で 5 虚しい幕切れ

6 幻惑し変幻する白秋 7 天才の栄光の陰に

第四章 賢き妻はおろがみてあれ——与謝野晶子……

117

1 国権主義の申し子 2 組織者としての鉄幹

3 『明星』崩壊の過程 4 鉄幹時代の終焉

5 気躁^{けう}き妻となれる者 6 啄木と晶子の距離

7 晶子の進歩性とその限界

第五章 ひた走るわが道くらし——斎藤茂吉……

157

1 「斎藤茂吉ノート」との出会い 2 写生説の源流

3 茂吉の「実相観入」の説 4 無技巧のリアリズム

5 別離^{わかれ}と諦念^{ていねん}の中から 6 挫折の文学

第六章 ガス弾の匂い残れる黒髪を——道浦母都子……

195

1 心に流れる神田川 2 『無援の抒情』の軌跡

3 青春の落日

第七章 ゆえのなき差別怒りて——李正子……

211

1 虐げられた日々 2 同化政策のひずみ

3 「半チヨッバリ」と呼ばれても

第二部 愛は国境を越えて

第一章 民族の誇りのために―李正子歌集『鳳仙花のうた』に寄せて……

229

- 1 頬かぶりしてきた日本 2 祖国愛か現実か
- 3 眼に見えない壁 4 二つの言語、二つの名前
- 5 望郷のうた

第二章 「閔妃暗殺」余聞―劇中劇と与謝野鉄幹……

255

- 1 恥ずべき暴挙 2 虚像の壮士「鉄幹」
- 3 壮士変じて人参買い 4 「人を恋ふる歌」異説
- 5 何のための偽装工作 6 禹範善とその刺客

第三章 ともに絞首台へと願って―大逆事件の「朴烈と金子文子」……

293

- 1 道浦母都子の「春の余白」 2 動機は破壊願望
- 3 頭脳の中での暗殺未遂 4 女闘士の素顔を追って
- 5 策謀と温情のはざま 6 剝落した偶像のメッキ

第四章 ソウルに異文化を俯瞰する——『ソウルの練習問題』をパイロットに…… 333

- 1 書物の急所を掴む
- 2 ソウル「慕情」
- 3 韓国人はおとなしい？
- 4 祖国との連帯意識
- 5 ユダヤ民族の教訓

第五章 誰よりも朝鮮を愛した日本人——朝鮮古美術に光をあてた柳宗悦…… 365

- 1 山陰に残る柳の足跡
- 2 ペンが救った光化門
- 3 「三笠」復元と言論の力
- 4 李朝陶磁器への開眼
- 5 朝鮮民族への愛と理解
- 6 朝鮮美術にみる「哀傷の美」
- 7 民族運動のルーツ

第六章 美に国境はなし——李朝陶磁器から民芸への道…… 401

- 1 死しても朝鮮に留まる
- 2 民衆のための工芸
- 3 民芸に共鳴した大原孫三郎
- 4 個人作家たちの葛藤
- 5 人間主義を貫いた柳宗悦

白熱のとき（序にかえて）

青葉薫る五月晴れの日々がいつしか過ぎ去って、東京も梅雨入りが間近い。

永年にわたって厚誼を賜り、亡父和夫の葬儀にも参列して下さった元首相大平正芳氏夫人志げ子さんの逝去を、六月四日、悲しみのうちに見送ったばかりである。

月日の流れ去ることの余りの早さを、身に泌みて感じながら、この一年間に於ける執筆の一つの句読点として、いまこの端書きに筆を染めている。

このたびの著書には、平成元年から二年にかけて、ほぼ同じ時期に、鳥取県の日本海新聞と大阪の関西新聞紙上に、それぞれ数回にわたって断続的に連載した原稿を、併せて収録している。

前者は、私の心にいつも揺曳し、いまなお折りに触れて愛唱してやまない歌人たちと

筆者との情動的なつながりにふれながら、その歌人たちが遭遇した運命的瞬間に焦点をあてて、その人生の起伏を鳥瞰してみようと試みたものにはかならない。

すなわち吉井勇、北原白秋、与謝野晶子、斎藤茂吉についての小論がそれである。

掲載時に「我が心の……」と副題を付けていることにも見られるように、この延長線でこれからも、私が馴染み、愛してきた歌人や詩人たちを、書き綴っていきたいと願っている。今回はその最初のステップと言える。

執筆中にたまたま勧められて、在日韓国人の女流歌人李正子氏の『鳳仙花のうた』を読み、戦争中、抑圧された民族の苦しみと哀しみを知っていたく感動し、連載の間に、あえて一文を草するという予期せぬ出来事もあった。

歌人についての原稿を、この機会に一つにまとめようとしたので、以前すでに発表したことのある、ロマン派の歌人川田順についての『螢は情念の象徴』と題する拙稿と、新進の前衛的歌人道浦母都子氏に共感した『まぼろしの旗』の二篇を、意図的につけ加えることにした。

本書の第一部は、以上のような内容をもって構成されている。

関西新聞紙上での連載原稿は、頭初から、近代に於ける日韓両国間の交流史上、メルクマールともみなされている出来事について、政治的、文化的側面からアプローチを試

み、両民族の相互理解と友好の発展に役立てようと願ひ、書き始められたものである。

それらは、李正子の抵抗の歌集、閔妃暗殺事件と与謝野鉄幹、大逆事件の朴烈と金子文子、関川夏央の異文化との接触、朝鮮古美術に光をあてた柳宗悦、李朝雜器と日本民芸運動などについての諸篇である。以上をまとめて本書の第二部とした。

こうして同時に二つの異なったテーマについて、二紙にまたがり、それぞれ執筆を続けてきた。

しかしひるがえってよく眺めてみると、おのおの別の顔をもっているように見えるが、筆を執ろうとした筆者の問題意識は、両者に共通していることに気付き、自ら頷いた。

描こうと願ったのは、一貫して、人間のもつ情熱とその現われ方についてである。

それは歌人、学者、主義者、政治家のいずれであるかを問わない。ただ、その現われ方を異にするのみである。

男女間の愛憎の種々相、抵抗と反逆、祖国への献身、美への憧憬などという具合に、それは、さまざまな精神の燃焼ぶりを伴なう。精神の白熱した状態を示すものであると同時に、人生に於ける決定的瞬間であるとも言える。

知らず知らずのうちに筆者は、そこを書きたいと望んでいたようである。

そこで一部と二部の最大公約数となっているテーマ、つまり情熱の燃焼という事象を

普遍的にとりあげて、この著書の表題を『燃焼』——人生に於ける白熱のとき——とし、合本として上梓することにした。

こうしてみると、若い時から愛読、熟読してやまなかったオーストリア生まれの世界的な伝記作家ステファン・ツヴァイクが、一貫して人間の情熱に焦点をあてている諸著作に、いかに深く影響を受けているかを、今更ながら改めて思い知らされた。

この一年間は、著者の身边にも慌しい変化があった。京都金融筋の要請で、請われて近畿放送社長に就任（平成元年七月）したことである。

その繁忙の間をぬって、この著書のための執筆が進められたので、十分に意を尽くし得なかったという想いがつよい。だが、俗務がふえつつある昨今、いつ理想的な形で著作をまっとうできるか確信をもちにくい。

このため、やや拙速にすぎる観があるが、繁忙の間のすさびの記念として、このような体裁で上梓にふみきったわけである。

最後に、この連載の執筆にあたり、終始一貫、問題提起や資料提供の面で尽きせぬ協力を得た朝日新聞記者、衛星チャンネル勤務の山下靖典氏に対し、深謝の意を表したい。その該博な情報力と端倪すべからざる人間関係において、後進ながら畏敬の念を禁じ得ない存在である。

また連載にあたって、新日本海新聞社の吉岡利固社主、金田裕夫社長、白岩尚専務取締役、及び関西新聞社社長池尻一寛氏、担当の東堤正文氏に言葉に尽きせぬお世話になった。

さらに執筆に際しては、資料収集、原稿整理などの面で、我が社の大塚正雄、星野匡彦君の労をわずらわした。併せて深い謝意を表したい。

諸氏の協力なくしては、この著書も決して陽の目をみなかつたであらう。

平成二年六月五日 細雨煙る午後に著す

第一部

わが心の歌人たち

だらりの帯が動くとき

螢追い螢追いつつ

タリヤは紅しタリヤは紅し

賢き髪はおろがみてあれ

ひた走るわが道くらし

ガス弾の匂い残れる黒髪を

ゆえのなき差別怒りて